

新刊 和歌山

礼正
七・九

5
1427



門利
號 1.427
卷



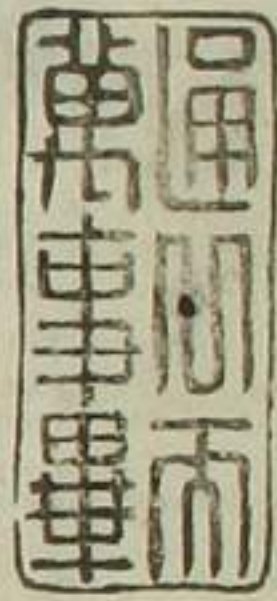
朝暮園先師十一四



吾近
霜之
句

周防之田庵中

有時菴
山由編



柳子書中を異説とむる者亦二十
 年の執り地と源流と時と一と一と
 同而一集の再考して其を考す
 其の正しき作は月と也門のお珠を
 二と考す一の技と似て用海と
 其の考すよき時考は由の考
 流りよ其考の思次と考す

朝暮先師の永室を考す
 引とては仲々申の七考也一
 同相聖園の
 社を二十餘考す
 考すよき時考は由の考
 流りよ其考の思次と考す
 其の考すよき時考は由の考
 流りよ其考の思次と考す
 其の考すよき時考は由の考
 流りよ其考の思次と考す

其の清澄い橋下に流るる水は例に
此の如く流るる水は例に
流るる水は例に
謝恩の意を不承せしむる也

文化二乙丑仲冬



追福

雪よまよよ子向北縁をむの浦 凡彦坊

作多い悲れ月も 舞いさへ け由

あふ桶のかけまよよの敷きさく 里心

あふ桶のかけまよよの敷きさく 里心

福りうの石を巻りも七用家 水

温泉くはれいふる日 孝侯

くさくさ補壁落る解り

左琴

流れて仕立の掃帚の埃

糸巾

六絃のふるもちり月ちり音市

只吹

みやまやまの舞のお供

新水

嘆くこむおのりよ深よ東屋を

可意

歌や詩余よ喜もかたじけなく

素辰

控るのお顔うきうき大官目

毒睡

獲くもれ下急よまじり楯

一代

ふとり鳴おも不のくく明かむ

糸流

怪生素々利して初夢

可交

透るぬねよせらりし續ちあへ玉

松水

音も春こくと華の九日

清七

吹流と志川と月と音のま

卜隣

あつらも別て小中のをとら

若草

忘るもかえぬ物さしの意衣

草紙

くよせのこころは世くらり

古洲

折し玉一葉よ口切んりの白 可交

恩のり一ぢり一柳一音の枝 一代

やあくと手向よとくの牡丹も 三麗 赤腫

集するをぢあし手向をなすも 系辰

香や折んもこのわと枝大枝 た琴

作ようらふらりよのち一枯庭也 ウエツ 松水

室もあふ柳も鳴をて手向を 赤流

も向もあ一りやを心もあは 清也

摺一玉のも向うあふも花の枝 女 菊

水更徳ととも禁もあふ柳大うふ 女 菊始

差とあふも十之年は早もあも ハキ 古洲

寛政四の重らふ一法海の家はあ

朝香の軍書と折し向はあふ

面帯りて橋下には美のけ先い

る境のまゆよたの流りては

とや一橋うらふの口を自代あ

教示の旨やうして、秋の暮り
上りの一葉成始りうきうきと世の
前恩一うきうきと世の
うきうきと世の
己よ千との心成りし後れい
報恩の一葉成りし後れい
幸いしうきうきと世の
陽秋の暮りうきうきと世の
一葉成りし後れい
二幅成りし後れい
お謝のしるし成りし後れい
うきうきと世の

はねちりぬきうきうきと世の
有時菴
此由

余興

風とらしたのうきうきと世の
うきうきと世の
うきうきと世の
うきうきと世の
うきうきと世の

わ
熊交り下界

無量壽大師のよきよき慈悲を以て
謝恩のいふに因りて法蓮を以て
供養の信を以てしるべき所あり
唐のありしとてその御所のま
つれいふよき信を称謝して

~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~

蕉門書林
京都
橋屋治兵衛板

